

チンゲンサイ

特徴

冷涼な気候を好むので秋まきが栽培しやすい。ハウスを利用すれば周年的に栽培することもできる。土壌を選ばず、適正pHは5.3~7.0と比較的酸性にも強いが、堆肥などの有機物を多く入れ、土づくりは十分に行う。

種の発芽適温は20~25℃であるが、育成適温は15~20℃であるが、比較的暑さ寒さには強い作物である。冬から早春にかけてはとう立ちしやすい。

作型と品種

作型	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	主な品種
露地	ハウス				○	□		○	□	○	□			青武、青美 青軸バクチョイ
ハウス				○	□					○	□			青武、青美

作り方

1.ほ場の準備

土作りと基肥 1作目の前に堆肥を1aあたり200kg、苦土石灰10kgを全面によく混ぜる。

堆肥は育成期間があまり長くないので、全量基肥とし全面によく混ぜておく。

土質や前作との関係、ハウス栽培かどうかを考えて施肥量は加減する。ハウスで続けて栽培する場合や、育成期間の短い夏は施肥量を3~5割減らす。

うねづくり

ほ場の大きさによってうね幅は異なるが、中央をやや高めにした平うねをつくる。

マルチの活用

夏は地温を下げるため白黒ダブルマルチやシルバーマルチ、春や秋は雑草予防や土のはね返りを防ぐために黒マルチを使うのもよい。

2.種まきと間引き

直まき栽培と、移植栽培がある。

直まきでは条間15cm、株間12~15cmの点まき（1カ所4~5粒）か、条間15cm、株間2~3cmの条まきにする。混み合わないように入間引き、本葉3枚で株間12~15cmとする。

低温期や根こぶ病の発生ほ場で栽培する場合は移植栽培がよい。育苗は連結ポットやプラグトレイを利用するとよい。市販の育苗土を利用する。

低温にあうと花芽をつくり、とう立ちするので、育苗場所には平均気温13℃以上、最低気温5℃以上に保つようにする。トレイで育苗する場合は、乾燥しやすいので適宜水やりする。育苗期間12~15cm間隔に植え付ける。

3.水やり

種まき後~発芽揃いまではやや多めにし、その後は根張りを良くするために乾いたら水やりする程度にする。移植する場合は、移植後~活着まではやや多めにする。湿度が高いと病気の発生が増えやすいので注意する。

収穫予定の1週間前からは水は控えめにする。

病虫害の予防

- ・アブラナ科の連作を避ける。
- ・ほ場をきれいにする。根や葉を残さない。
- ・高うねにしたり、排水をよくする。
- ・密植を避ける。

白さび病

葉の裏側に白いふくらんだ小斑点ができ、葉の表面も黄色くなる。梅雨や秋雨の頃に多い。広がるのは早い。

<対策> 白い斑点ができたらずぐにつみ取る。

根こぶ対策

雨よけで栽培する。

根に大小のこぶができ、日中しおれるようになる。一度発生すると毎年発生する。

<対策> 抵抗性品種（CR青都など）の利用。

アブラムシ、ヨトウムシ、コナガ、アオムシなど

<対策> 大きな虫は手で捕る。7~8月にかけては高温対策とあわせて、寒冷紗でトンネルにして虫の侵入を防ぐ。

収穫

種をまいてから、春まきや秋まきで40日、夏まきで30日、冬まきで60~70日くらいで収穫できる。草丈が10cm以上になれば収穫して利用できるが、一般的には20cm前後で収穫する。集荷は涼しい時間帯に行い、1株ずついいねいに抜き取り、根と外葉を落とす。